

「研究著書の概要」

NO.J2432

活動題目：中国共産党中央局の研究——中国の広域統治機構 1949-1966

所属：武蔵野大学 法学部政治学科 講師

氏名：黄喜佳

貴助成をうけて、東京大学出版会より『中国共産党中央局の研究——集権と分権を架橋する広域統治機構』を出版した。

本書は、中華人民共和国(以下、「中国」)において1949年から66年まで、共産党による地方の派遣機構として存在し、その後の地方統治にも影響を及ぼした「中央局」から、中国の中央地方関係や集権・分権の枠組みを再考したものである。中央局は、一派遣機構でありながらも、中央の権威を代表する、中央と地方の二面性を兼ね備えた統治機構であった。本書ではこれを、中国の伝統的な行政の枠組みである「中央—省」の間に介在し、複数の省を包摂したものとして「広域統治機構」と位置づけ直し、その持続的な運用と展開のありようを論じた。

中央局については従来、その存在が認識されておりながらも不明な点が多く、一部の共産党史や中央地方関係の研究において、部分的な言及がなされるだけであった。これに対して、本書では新たに上海市檔案館の公文書や香港、オーストラリアに所蔵される海外流出資料等を用いて、中央局を中心とする広域統治機構の機能の究明につとめた。その結果、中央局は共産党政権と地方政府との間で、一貫して政策や利害関係の調整の役割を果たしていたことが明らかになった。つまり当時の中国は、広域統治機構の存在によって折衷的な政治状況を維持し、制度的に地方を統合しながらその活力を保つことができていたのである。このことは、権力が中央に高度に傾斜していたとされる毛沢東時代の権力構造の理解や、集権・分権という二項対立の議論に修正を迫るものであり、中国共産党史の研究に一石を投じたと考える。

また、本書では中国国内の動向のみにとどまらず、当時の台湾海峡危機やベトナム戦争などの国際情勢とも連動した広域統治機構の展開を論じており、このことは、従来個別に論じられてきた現代中国のイデオロギー、行政、外交、軍事などの諸問題を整合的に理解していくうえで新たな見方を提供するものである。このように本書の考察によって浮き彫りとなった中国国内の中央地方や海外情勢、さらにはそれらを折衷して効果的な統治を果たし得る広域統治機構の柔軟性は、毛沢東時代のように集権的な体制の構築を目指していると評される現在の習近平政権の行方についても、一定の示唆を与えるものである。

以上のように、貴財団の出版助成をうけて出版を実現し、中国の統治システムに関する本書を世に問う機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。